

調査日 群馬県森林組合連合会共販所 4月3日

年度が明けて令和6年度の最初の市である。

とは言っても前回の市の続きが展開される訳だが、季節は春を迎えている。

山の木々は冬の眠りから覚めて活動を始めている。つまり水を揚げて、新芽を伸ばし始めている訳だ。多くの買い方たちは「今年は水揚げが早くに始まるだろう」と見ている様だ。虫害が始まる懸念である。気温の変化が”三寒四温”ではなく”三冷四暑”とでも言うべき陽気で、振れ幅が大きく1日の内に真冬から初夏へと移ろう日もある有様だ。

人々が愛でる花を咲かせる木々は花を咲かせるタイミングに戸惑っている様子だ。

梅園の梅も1月末に1本だけ満開になっている物があつた。この木はあまり収穫は期待できないだろう。かと思えば、咲き遅れて桜が咲き始める今頃まで花が残っている梅もある。

その桜にしても、温度が上がって一気に満開に達している木もあれば、乗り遅れて再び温度が下がり蕾の成長にブレーキが掛かって、次の好天を待つしかないといった風情で、“一斉に開花”と感じるにはもう少し時が必要かもしれない。

スギやヒノキも同じ事で、おそらく1本毎に水を揚げ始める時季は幅が出ているのであろうが、材として生産される時は一緒であるから、買い方は早くに活動を始めた木を見て判断しているのだろう。

材の使い方も、冬に落札した丸太は在庫として後回しにして、今日落札した丸太から先に使う様だ。今頃から夏までの丸太は、“買った丸太は直ぐに製材する”。虫害が進むからだ。

伐採された丸太は、少しでも早い時期に売り切らないと誰にも相手にされない材になる。

それが例え年輪が詰まり更に真っ直ぐ通直な良質であっても、山土場で梅雨を過ごすような事があれば、チップ用材になりかねない。そうでなくてもこれから夏にかけては売りずらくなる季節だ。

これからの季節の林産事業は“伐ったら間髪を入れずに売り払う”を旨としなければ、単価に大きく影響して、計算には出にくい損害になるだろう。

「あの時すぐに出荷していれば、あの単価で売れたのに今は安い。総材積×価格差では大きな減収だ」となる。渋川の加工センターも、これからは仕入れを抑える季節に入る。

この事に付いてもう一つ気掛かりな事がある。2024年問題と言われる働き方改革だ。

トラック輸送が命綱の国内の木材輸送について、国内の広範囲な木材流通に大きな支障が出る。

長距離輸送ともなると、1人のドライバーで少しでも多く運ぼうと、フルトレーラーで夜間の仕事であったがどうしても、10時間ほど走るようになる。これが出来ないとなると、中間地点に交替のドライバーを待機させると言った不都合も生じる。これが転じて地元の近距離を優先すると言った方向になれば、山土場からの出荷は動きが良くなるだろうが、全国的な木材流通には間違いなく悪影響が出るはずで、工場から先の木材流通は委縮に向かうだろう。結局1次産業にしわ寄せが来るではないか！

調査日 素材生産協同組合 4月8日

素生協も年度初めの第1回目の市である。

入札結果の発表の前に、剣持所長から2名のフレッシュマンが紹介された。この2名に加えて少し早く採用された女子職員が加わり、若返ったメンバーで新年度のスタートである。

特に農林大学校から来た2名の男子職員は、少しでも長い時間を丸太に寄り添って、そこから様々な事を学び取ってほしいものだ。私が若かった頃は、すべてアナログだったのでいやおうなしに丸太に張り付きためつすがめつ丸太を眺める時間があった。丸太は自分の生まれや育った環境など様々な情報を発信している。幸いなことに私はその情報を受け取る時間を十分に与えられて育つ事ができた。

今は日々の仕事に追われていると、せいぜい近寄っても、フォークリフトの座席から見る程度になってしまいがちになる。出来れば丸太に近寄って眺めてもらいたい。そこにはその木の生い立ちや昔語りが刻まれている。その木たちをどう使ったら良いのかを考える人になって欲しいものだ。

農林大学校の卒業生といえども、林業に足を踏み入れる人材は本当に貴重な存在だと思う。誇りをもって育ってほしい。

市の方だが、こちらも新年度を迎えて土場がかなりスッキリして見える。入荷したまま古くなっていた材も徐々に姿を消しつつある。また入荷も順調の様だ。土場の中で材がうまく循環している様だ。そんな中で、買い方の中には、自社で林産部門を持っている所もある。しかし年度変わりとあって林産部門も決算の最中なので、市場からの仕入れを増やしているとの事だった。

余りの暖かさに虫が動き出す心配に気を取られていたが、買い方にはこんな事情もあった様だ。

さて最近の住宅事情だが、都市部に行くほど持ち家志向は薄くなっている様だ。

更に最近では平屋が好まれている。そういえば住宅メーカーのコマーシャルにも2階建ては見られない。平屋は本来、住宅の基本形であり、歴史を遡っても寝殿造りなど格式のある建物は当たり前のように平屋である。城にしても城内の御殿は平屋である。天守閣は単なるオブジェであるから住居ではない。しかし最近の平屋ブームはこう言った方向ではないらしく、小さな平屋がトレンドらしい。

子どもが育って独り立ちした後、夫婦で静かな余生を送る時を基準にして家を建てる様だ。

代わって現在木材需要の成長株は”施設物”と呼ばれる介護施設などの大型の建物である。

施設物もやはり平屋が基本で、床はフラットである。木材の利用量が多いが横架材には長い物も必要になる。そこで集成材という事になる。1本物の長い木材は使うのが難しく公共物には使えない。

今や集成材は万能である。どんなサイズでも作れるし、木造を知らない設計士でも使える。

木造ビルなどという言葉も聞くようになった。建築家の隈研吾氏の効果か？

接着剤も日々改良されているが、接着剤の経年劣化の生きたデータはまだ無い。